The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青年期女性の自己形成に果たす性の役割 : ストーリー性の視点から
Author(s)	稲本, 和子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44168
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	稲本和子（いなもと かずこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　17473　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**青年期女性の自己形成に果たす性の役割　ーストーリー性の視点から**
論文審査委員	（主査） 教　授　藤岡　淳子 （副査） 教　授　三木　善彦　　助教授　榎本　博明

論文内容の要旨

本論文では、青年期女子の自己形成において、性の果たす役割を主観的視点から検討する。性に関する実証的研究では、主として性役割をテーマとするものが多く見られる。しかし、性役割研究は研究者側が設定する女性性の性格特性を論拠とした、ステレオタイプ的なものであり、対象者自身が女性性と認識するものではない。また、現代社会において性役割に関する価値観は多様化しており、個人の中で本人らしさを主体とする女性性を再構築していく必要があると考えられる。

第1章では自己内における性的側面、すなわち、女性としての自己をどのように形成するかを理論的に検討した。先行研究における性に関する概念、また操作的定義を概観し、自己概念の一部として性的側面を概念化し、主観的観点からの検討をおこなった。また、女性性形成に関する外的要因と内的要因の検討、発達的検討をおこなった。これらの要因は個人差を前提として検討したものであり、また、性に関連する心理的問題について概念整理をおこなうものとした。

第2章では、女性としての自己に対する肯定的感情について実証的に検討する。始めに尺度作成をおこない、信頼性と妥当性を確認した。また、概念の理解を深めるために、精神的健康性や対人形式との関連性、ライフスタイルに対する態度との関連を検討した。また、性肯定度尺度には女性としての満足度、女性としての自己存在の肯定感、女性としての自意識、他者評価における女性としての肯定感の4つの下位概念があり、これらの探索的検討もおこなった。全体的な性肯定度は心理的健康性やライフスタイルと関連するものであった。下位概念の検討からは、両親間との関係性で、満足度や自意識、他者評価の肯定感は家族内、特に父親への評価と関連が見られた。心理的健康性に関連するものに女性としての満足度と女性としての自己存在の肯定感が関連することがわかった。ライフスタイルにおいては、平等主義的態度と他者評価における肯定感がやや関連し、恋愛・結婚・出産には女性としての自意識が関連することがわかった。自意識は主体的な意思と関連するため、健康性とは関連が無く、むしろ個人の価値観や志向性により決定されるライフイベントとの関連を有するものであった。他者評価の肯定感は父親への評価が高く、また両親の仲が良い時に低下し、平等主義的態度との関連が示唆された。

第3章では、女性性概念の検討をおこなった。個人的女性性概念と社会的女性性概念との比較検討をおこない、両者の差異を検討した。また、自己の女性性イメージとの認知相関を算出し、個人的女性性概念との内部相関の高さをあきらかにした。個人の行動形態は個人的女性性概念を準拠枠とするといえる。また、女性性形成の状況依存性につ

いて検討するため、場面別自己イメージとの認知相関を算出し、対異性場面における態度変容は、個人的女性性概念を準拠枠としておこなわれることを証明した。次いで女性性概念の形成要因について、個人的要因と環境的要因からの検討をおこなった。

第4章では女性としての自己についての「語り」を、15人の語り手を対象に面接調査をおこなった。個人差が生じる「語り」の文脈について検討をおこなうものである。個人の主観的視点における、より深い意識レベルでの検討を目的とする。また、女性性意識は潜在的意識として有する傾向があることから、「語り」という相互作用的要素を含む方法は、前意識領域での女性性を理解する上で妥当であるとの認識によるものである。結果、過去想起における語りには各発達段階ごとに特徴が見られ、環境的働きかけから主体的女性性形成へと移行していくことがあきらかとなった。各語りの文脈には個人差が顕著にあらわれ、個人の女性性を形成する特徴は女性としての肯定的感情や、女性性概念と自己の女性性イメージとの内部相関を反映するものであった。また、過去想起においても文脈の個人的特徴はあらわれており、語り手の関心や重要とするテーマと関連するものや、「語り」の時点における内的状態を説明しうる内容であった。

以上の内容を検討した結果、本研究では次のように結論づけられた。

女性であることの肯定感は個人の人格形成上においても主要な領域であるといえる。また、個人的認識を枠組みとした、個々の状況における対応の中に女性性の概念は存在するといえる。また、同じ「女性性」という枠組みでも、個人がどの文脈に女性性を位置づけるかは異なるといえる。それゆえにそれぞれの文脈のもとで、自己形成との女性性形成の統合がおこなわれるといえる。

自己形成における女性性の側面は、基本的に自己の性別に基づいて形成される。自身の性に対する肯定性は女性性の形成における独自性を促進するものであると考えられる。性役割は外界の影響と同時に、個人の概念形成により形成する側面も大きい。女性性における概念と自己の一致度は、女性であることの適応感を作り出すといえる。女性性概念がステレオタイプ的であるか独自性を持つかは、自己に統合させるうえでの精神的負担と関連する。個人の概念と外界からの働きかけや環境を、どのように相互的に作用させるかは、個人の有する文脈に大きく影響される。

本研究の結果により、性差は意味があって存在するものであり、自ら作っていくものであると主張したい。少なくとも自己の性別を同一視する者にあっては、関係性をも形成しながら独自の女性性概念を持ち、自分らしい女性らしさを形成することは可能であるといえる。一方では、性役割は時代的要因や文化的要因、また両親からの働きかけや人間関係での相互作用においても影響を受ける。比較概念である男性性の存在なくしては、女性性の概念も成立しえないといえる。その意味では、自己の女性性は外界との相互行為なしに形成しえないと考えられる。性役割の価値観が多様化する今日、画一化されたものではなく、個人の自己形成に合わせた女性性形成が重要であるとの結論に達した。

本研究は女性性形成の理解への一助となるべく、調査と検討をおこなった。本稿で詳細にとりあげられなかった、交際や結婚等の親密性が問題となる人間関係も、女性の側面に重要な課題であると考えられる。特に青年期では、恋愛や性行為等のセクシュアリティを問題とするものも性に関する重要なテーマと考えられるが、これに対する検討は今後の課題としたい。

論文審査の結果の要旨

本論文は、青年期女子の自己形成に性が果たす役割を、女性自身がどうとらえているかという主観的観点から検討している。

具体的には、自らの成長に関する青年期女子の「語り」の内容および性肯定尺度への回答と、精神的健康性、女性としての満足度、ライフスタイルに対する態度との関連を検討した。

特に、「語り」を通じて、青年期女子が、外界の影響を受けながらも自分らしい「女らしさ」を徐々に形成し、それが適応感や自己形成につながっていく過程が示された。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。